

## カンリガルボ山群・ロブチハ峰(KG-2)初登頂

神戸大学山岳会 井上達男

ヤル・シャンポ 川が流れを東から南に変える所謂大屈曲点付近から東南に全長約 280km に渡つて広がるカンリガルボ(嘎口嘎布;Kangri Garpo)山群は 6000m 級の未踏峰が林立する地球上に残された秘境となつてゐるが、ただの一峰もその頂を人類に明け渡すことなく今日に至つてこた。

山群の最高峰は茹尼峰 (Ruoni Feng 6882m)、最近の中国の地図では巴日嘎峰 (Bairiga Feng) だ。1993年に神戸大学が挑戦したが、豪雪、悪天候及びセイラクに歩みれた険悪危険な頂上への稜線に阻まれて敗退してこる。山群の高峰群は拉枯 (Lhagu) 氷河と阿扎氷河 (Ata Glacier) 流域に棲むところだが、阿扎氷河には我々が三姉妹峰と呼んでる 6700m を越す三つの顕著なピーグが存在し、仮に KG-1(Ruoni)、KG-2、KG-3 と名づけて識別していた。

1997年、再偵察の結果、三姉妹峰の中央峰である KG-2 が純粋で秀麗な山容を持つた立派なピークであることが判明した。また KG-2 峰のみ登頂可能なルートを発見することができ、これを中心とした山の対象に選んだ。

1999年十一月五日、神戸大学・中国地質大学(武漢)合同調査団が布山群学術登山隊は KG-2(6805m) の初登頂に成功した。最初に頂上に達したのはチベット出身の学生、德慶欧珠 (Deqing Ouzhu) と次仁旦培 (Ciren Danda) の二人であった。チベット出身の学生が故郷の処女峰に初登頂するのは快挙であり賞賛に値する。引き続き十一月七日、日本人、矢崎雅則と近藤昂一郎の二人が頂上に達した。そしてこの山群によつやく初登頂時代が訪れた。

一方、竹田真木生神戸大学農学部教授を隊長とする学術班は雲南省よりチベット東部の昆虫調査を試みたが、チベット自治区への入域を拒まれて雲南省での調査活動に限定された。しかし、新種の「ホロギ」を発見するところの貴重な成果を得る事ができた。

### I. ロブチハ峰(KG-2)の地形について

さて、カンリガルボ山群にせよどのような山々が存在するのか。中村保氏や松本島夫氏などの研究成果が発表されてゐるが、まだ多くの山々や谷が未知、未踏査のまま残されている。また、麓の村落から遠く離れていたり、隠れていたりで生活に密着していないせいか、人知れずひつそりとたたずんでいるピークも多い。以前のある山は宗教上の聖山で、それが麓に近く 5000m 級の山が多い。従つて多数の無名峰が存在している。また、この山群のピーク標高は四つ連の地図に負ふところが大きいが、五十年

以上も昔の航空機測量によるものと推測され、その信頼性には大きな疑問もある。また、中国の発行する地図は入手が困難である。そこで標高でピークを識別することは混乱を招くので主要ピークにカンリガルポの頭文字「KG」を付けてピーク番号で識別する」とした。

ところが KG-2 峰にはまだ名前がなかった。今回登山の相手である中国地質大学は仮に若尼 峰と呼んでいた。しかし、若尼峰から約五キロメートルも離れている独立峰に 峰とするのは頂けない。現地の人達もあいまこだが、「田ニ鳥の峰」といふ者もいた。現地の呼び名があれどもそれを最優先に命名したこと尊えていたので登山の前後に地元の拉古村でチベット人学生にお願いして村長をはじめ村人達に聞き取り調査を行った。そして、最終的に村長にまとめてもう一つになった。このたび、地元の提案を受けて議論の結果、次の通りの名前が確定した。

## KG-2 6805m の名前 (ホーバン山)

日本語 ローバン 登

英語表記 Mt. Lopchin ローパン Lopchin Feng

中国語表記 洛布青峰 Lou bu qin Feng

Feng)」である様も丑ねたが、やせり現地の呼び名を尊重すべしとの御意に附いた。なお、村長の「田ニ鳥の峰」と書いた呼び名も加味して、「田ニ鳥の峰・ローバン」と書くよりは好んでこな。既に中国登山協会にも報知し、この名前を正式とするようお願いしてい。

## 二・カンリガルポ山群の未踏峰と標高について

カンリガルポ山群には三十座程度の 6000m 級未踏峰が林立つところがわれてこる。昔今入射可視になつた NASA World Wind、Google Earth 及び 2009 年に新たに公開された ASTER GDEM(The Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection radiometer / Global Digital Elevation Model)GDEM おおよそ 100 の丸母の我々の現地観察結果などを総合的に参考してカンリガルポ山群の未踏ピーク(おもに 5500m 以上)の回数と標高の推定を行つた。現在並べて約八十座の識別番号を付けて Google Map にその位置をプロミッコした。(地図 1 参照) ものの 6000m 以上の標高を持つところ、あることは持つところかも知れなく一ヶ所を表にまとめた。(表 1 参照) 全部で四十五座の 6000m 番を数べぬものが丑來ぬ。

今田あたり入手可能な地図や著書に記述されている標高についての意味がある。大学回十の山回廊の「大卦峰(Daxue

ても疑問が多くある。神戸大学山岳部は1990年に初めて阿扎氷河を訪問して以来、カンガルボ山群の山座回定を続けていながら、新しい情報を入手するたびに主観ピーカークの標高に関する見直しを余儀なくされた。

その典型的な例が KG-2 (ロブナハ峰) の標高である。1990年十一月廿日、三原にて近藤昭一郎隊員が GPS 標度を記録した結果、6805m を得た。従来せ珉フジヒト連邦の地図における標高、6703m だったのに驚くべき差異である。

地球観測衛星 TERRA に搭載した最新の ASTER のデータである ASTER GDEM の情報を使って従来の数値と比較してやれりの差異を検討した。**表 1** に Google Map 及び松本駒夫氏のスケッチマップなどから得た標高を加えて、ASTER GDEM も簡易的に得られた数値を示した。ちなみにロブナハ峰 (KG-2) も 6791m だが、GPS 測定の数値 6805m との結果を併せて示す。

衛星からの測量データでは、仮説の域を出ないが、次のよひな傾向がある。

- 平坦地の標高は比較的に精度が高く、たゞ日本 Google Map の阿扎氷河本流の標高は我々が用いた GPRS [ GARMIN ] で測定したデータのはむつや 10~15m 程度に墜つていて。
- ピーカークの標高は、頂上部がピーマ型の山峰ピーカークにっこりせ GPS ピーターライトの値がやや低い標高 (10~15m 程度の最大値) を示す。一方、ピーマ型やナメコ型の山峰に

稜線を持つピーカークは皆ヒート 50m 超の実際より山頂へ向す傾向がある。その例として KG-28 (Tongkole) と KG-29 (Pongle) の例が挙げられる。2009 年の登山隊が綱引山に撮影した写真と観察結果から KG-28 (5800m) > KG-29 (5770m) と推定したが、GDEM ピーターライト KG-29 (5759m) > KG-28 (5703m) と KG-29 は比較的同じくやや低めの値だが、尖峰では KG-28 も 100m 近い差異となつている。

II . ASTER GDEM のピーターライトはまだだハイゼットが多く 3D View で見る限りはピーターライト欠陥が見られる場所が多いが、カンガルボ山群の山稜線のピーカークは山頂と照らし合わせる山稜に沿用可能だ (**図 2**)。但し山肌や氷河上のマウントや壁みが不自然に並ぶのでまだまだ観測ピーターライトの蓄積とシステムの改善が必要と思われる。

**図 2** . Google Earth に表示されたピーターライトに出撃して ASTER GDEM の地域の標高ピーターライトと出撃して ASTER GDEM の値も精緻化されただけでなく、ピーターライトの精度が高まっているが、前述の通りそれがややもするとピーカークの標高ピーターライトが得られる誤りではないのだ。

従来の標高と比較して ASTER GDEM の標高が大きく異なるた  
例として、ロブナハ峰の山頂 KG-37 6554m (従来 6443m'  
写真 6) と KG-18 6554m (Gemsongu 従来 6450m) が挙げられ

る。末踏峰登山におこり 100m の違ひは大きこ。

結論としてカソリガルポ山群には 6000m 峰が少なくとも四十五座は存在し、それぞれの従来認識されている標高は最大約 100m 程度の誤差があり、より精度の高い数値は今後の研究や測量、測定の結果を待つ必要がある。しかし、単純や GPS ハーダなど複数の情報源を参照し、衛星による観測データを評価して活用することは有意義である。

### III・ロブチン峰初登頂

#### 隊員構成 十七人

- 一〇〇九年十月十日、蘭西空港を出発した日本側本隊廿五日、中国地質大学(武漢)にて単回隊の結団式を終えて学生九人を含む総勢十七名の神戸大学・中国地質大学(武漢)単回カソリガルポ山群学術登山隊として拉薩に向かった。
- 一〇〇九年十月一日、新中国は建国六十周年を迎え、記念式典が各地で盛大に行われていたが、チベットでは暴動の警戒など緊張が高まっていた。登山隊の許可問題が微妙な状況であったが、無事記念日を終えた後の日本出発が尋こしき何事もなく現地入りできた。
- 神戸大学と中国地質大学(武漢)は一九八八年に第一回の単回登山を実施し、四川省の雀兒山(6168m)に初登頂してこる。今回は二度目の単回登頂である。単回組合にあつがちなハリカーネー
- ▼ 日本側(七人)
- ◆ 旅行部監修長 山形裕十(59:農学部教授)
  - ◆ 隊長 井上達男(62) 福島良(秘書)山田健(54)
  - ◆ 登攀ワーカー 日本惠留(51)
  - ◆ 隊員 矢崎雅昭(35) 近藤昭一郎(23:理学部大学院生) 口丸祥哉(19:農学部准教授)
- ▼ 中国側(十人)
- ◆ 隊長 董範(Dong Fan)(49 教授)
  - ◆ 番隊長 牛小洪(Niu Xiao Hong)(41)
  - ◆ 番隊長 李倫(Li Lun)(32)
  - ◆ 隊員 德慶欧珠(Deqing Ouzhu)(22:獣生、チベット)
  - ◆ 隊員 次仁旦增(Ciren Danda)(22:獣生、チベット)

シテハ不走やマイハシのズレなじせ中国側隊長が雀兒山の隊員だったことなどから相互に理解しあえる間柄であり良いチームを作れたことは歴頂成功の大きな原動力であった。

今回の単回登頂では資金面でも運営面でも対等に行うこと前提として、相互協力によるシナジー効果を期待したが、概ね狙い通りの結果であった。

(Yuang Fudong)(24:新井) 張瑜(Zhang Yu)(24:新井)

李升鵬(Li Shengpeng)(29:大朴院新井) 張璐(Zhang

Qun)(24:新井) 宋綱(Song Gong)(20:新井)

▽ 連絡血 達瓦(Dawa ハグマト紹三透(体)

中国地質大学(武漢)便の隊員は 8000m 峰の登頂経験者も多く、

中にはチマリヒマリ三度登頂してこぬハグマト出身の学生二人も含まれており、カンリガルポ山群での初登頂にかかる意気込みが伝わる隊員選考であった。

## 登山活動概要

- 十月九日 先発隊関西空港出発 拉薩にて食料など調達
- 十月十日 本隊関西空港出発
- 十月十一日 武漢にて結団式
- 十月十一日 武漢→成都→拉薩----仰路
- 十月十五日 拉薩→米拉日 5013m=林埡(ハイ) 陸路(川藏公路)
- 十月十六日 林埡→波羅(Bomi)=然烏(Rawu)
- 川藏公路は道路の拡幅と舗装が進んで拉薩から拉古まで三日で到達できた。途中数知れず検問を受けたが揉め事もなく入山できた。無許可の旅行やトレッキング、登山はより厳しく取締りが実施されているが正式許可を持つている
- 十月十七日 拉古(Lhagu)
- 1100七年に偵察隊が宿泊した觀光客邸の招待所は閉鎖されていた。我々は福村長の血供に宿泊し輸送の手配をした。連絡血達瓦氏は11月26日、ベースキャンプには入らず。
- 十月十八日 拉古⇒Kogin⇒Chutsu⇒BC(4320m)
  - 拉古村からベースキャンプまではヤクー11頭にて隊荷を輸送。又、ベースキャンプから10ポキヤンナップへの荷揚げには十名のボーターを採用した。
- 十月一十日 Deposit-Camp(4440m) 設置
- 十月一一一田 BC 撤退、Depo-Camp 1 設置
- 十月一十一日 ABC(4660m) 1 集結
- 十月一十九日 Camp-1 地形観察
- 十月二十九日 Camp-1 (4890m) 建設
- 十一月一田 Camp-2 (5680m) 建設
- 阿扎冰河の本流からカンリガルポ山群の主稜線、ルオニイチラス(御足峰の北東に位置する標高 5900m~6000m の山地)へのルートは1100三年に採ったチカラスルハイと呼んだ阿扎氷河の南支流の分流を予定していたが、当時より氷河が荒れてクレバスやセラックが発達して側壁からの雪崩の危険性も高まっていたため、使うことが出来なかつた。(写真)

3) 結果として、一つの南氷河本流の第二アイスフォールを真っ向から突破するルートを探り得た。

十一月三日 企画 C-1 集結 アタック態勢確立

十一月四日 第一次、第一次アタック隊、C-2 <

十一月五日 中國チーム 第一次アタック

(C-2 がつ五人出発、三人は登頂断念)

中国チームの徳慶欧珠 次仁田塔 一名 十三時十八分  
登頂 (午前三時半 C-2 出発、十四時間行動)

日本チーム四人<sup>±</sup> Camp-3 (5910m) 建設

十一月六日 降雪、待機

十一月七日 第一次アタック

日本チーム 矢崎、近藤 午前八時 C-3 出発、午後三時三  
十六分 登頂、午後八時 C-3 戻還

中国チーム 田人が C-2 午前四時出発、C-3 手帳で故障者のため登頂断念

十一月八日 C-2 C-3 撤収

十一月九日 C-1 撤収

十一月十日 ABC Deposit-Camp 撤収(Deposit-BC 處<sup>±</sup>ボ  
ーター十人を採用)

十一月十一日 BC 撤収 拉加懸闘 ⇒ 然鳥

十一月十一日 然鳥<sup>⇒</sup>林芝

十一月十三日 林芝<sup>⇒</sup>拉萨

十一月十八日 拉薩<sup>⇒</sup>武漢

十一月十九日 中國地質大學(武漢)にて報告会

十一月二十七日 翻国

神田大学は1901年、1900年および1907年の三回の

阿扎氷河(Ata Glacier)訪問でカンリガルポ山群の悪天候を体験している。一晩に10センチメートル程度の積雪が三~四日も続くことがあった。1909年、晴天率は過去の体験と同様に三割、すなわち三日ほり一日晴れ間が出る程度であったが、幸いにも降雪量が少なかった。これが幸いして順調にキャンプ展開できた。しかし、1907年には氷河上の積雪が豊富で第一アイスフォールは比較的簡単に通過できたが、1909年には二ヶ所、クレバスに固定ロープを設置した。また、カンリガルポ山群の主稜線に登る側壁の氷河は1903年には特に大きな障害もなかつたが1909年は第二アイスフォールの突破に600メートルの固定ロープを使つた。

十一月三日 C-2 (5680 )の建設を終えてアタック態勢が整い、全員が C-1 に集結した。やつて、翌日、登頂隊とサポート隊九人が雪ひとつない細難の付のト、ロブチン峰の頂に向けてアタックを開始した。

C-2 はカソリガルポ山群主峰、若尼峰の足下に広がるルオニイテラスの上、インゼルの露地<sup>⇒</sup>壁に設置された。C-3(5910 )はJ

のチラスから登頂ルートであるロープチン峰の南東稜に続く緩斜面に設営する予定であった。登頂ルートはカンリガルポ山群の主稜線であり、広いルオリテラスからステップと呼んだ 6300m 付近の尾根末端の急傾斜部分に固定ロープを設置、その後は雪崩の心配がある深い積雪の急斜面が頂上付近まで続いている。頂上は大きな雪庇に守られていてこれの突破がポイントとなっていた。

協議の結果、元気な中国チームは晴天を逃すことなく C-2 からアタックを試み、第一弾として高度順化の不十分な日本チームは C-3 を建設して一回遅れて登頂を試みる一段階の戦術を採用した。C-3 のオペレーションに五日分の食料と燃料を準備した。

## 登頂

十一月五日、予定通り、中国チーム五人が午前三時半、暗闇の中月明かりを頼りに C-2 からアタックを開始した。しかし、C-2 から頂上まで 1100 の標高差の登攀はもとがに厳しく、結果的に二名、徳慶欧珠と次仁旦塔のチベット人学生隊員のみが天気が悪化した中、午後一時十八分に登頂した。C-2 帰着まで十四時間の行動であった。

日本チームはその日、オープニングクスに四人が C-2 を出発し、予定地に C-3 を建設、二名が翌日の登頂に備えた。翌日（六日）、C-2 C-3 は雪と強風で停滞。そして、七日、矢崎雅則、近藤聡一

郎が午後三時三十六分に登頂した。同日、中国側は五人が第二次アタックを C-2 から試みたが C-3 手前で故障者が出て登頂を断念した。日本側のサポート隊、山本恵昭と石丸祥史は C-2 から C-3 へ登り、アタック隊の収容に備えた。

アタック隊の日本人二人は深いラッセルに苦しめられ、登頂に七時間半かかりた。高度障害と疲労激しくかつ危険な下降にも時間がかかり、C-3 帰還は日没後の午後八時であった。風がトレースを消し去り、暗闇の中で C-3 の位置を一時見失つた。サポート隊の献身的支援によるきねじ C-3 帰還であった。日本人四人は一人用のテントで一夜を過ぐし、翌日 C-2 の中国チームとともに無事に氷河上の C-1 に下山した。どちらのアタックも晴天下の登攀であったが頂上ではガスに包まれていた。

## 四・気候変動について

地球温暖化対策が求められ、COP15 会議などを通じて CO<sub>2</sub>削減が叫ばれている昨今であるが、温暖化といつも葉でるとおどめにするのは無理があるようと思われる。

今年（二〇一〇年）一月の奥美濃地方は雪が多く鷲ヶ岳あたりでは普段は藪でスキー滑降ができるない頂上付近で新雪が楽しめるという状況だ。それに引き換え滋賀県の湖東地方は降雪が少なく通勤に苦労する日がないまま春を迎えた。湖北の山々は積雪が多

いので今年は山雪型の気圧配置が続いたのであるつか。

一〇〇七年の偵察隊は阿扎氷河のキャンプで豪雪を経験しているが、一〇〇九年は同じ時期、同じ場所のABCでは最大十センチメートル程度の積雪しか経験していない。しかし、登山中の十一月中旬には北京や武漢では季節はずれの積雪で交通機関の混乱が発生していた。

ヒマラヤ登山で登頂成功するには少ない好天に恵まれることが極めて重要である。現地に入つても天気が大きな心配だったが、比較的穏やかな天候が幸いしてロブチン峰の初登頂に成功した。

神戸大学は一〇〇一年、一〇〇三年、一〇〇七年そして一〇〇九年と都合四回同時期に阿扎氷河に入域しているのでこの地域の天候について貴重な経験をしている。それらの経験を大まかではあるがまとめておくことが今後の登山隊の参考になるのではないかと思つてゐる。また、この地域の気候変動についても少しほそのかの傾向を考察できるのではないだろうか。

### 降雪量の減少

アタ氷河の衰退は地球温暖化による氷河の融解と言うことであらうか。確かに夏期の融解はあるだろうが、冬、氷は解けない。もつと大きな要因は降雪量の減少ではないだろうか。この推論を裏付ける証拠として阿扎氷河の三姉妹峰の側壁や稜線のアイスキヤツプやセラックス、雪(氷)庇の変化が挙げられる。カンリガルポ山群の主峰、若尼峰東北稜のハンギング・アイスを撮影した写真が一〇〇〇年、一〇〇二年、一〇〇三年、一〇〇七年、二〇〇九年と手元にあるが、これふを比較するとルオニイ峰は徐々にそ

できる。じのような氷河はパタゴニアにも見られるが、降雪量が多い証しである。

アタ氷河に話を戻そう。まずこの北舌と南舌ではどちらが氷河の本流であるかということが問題だが、私たちの登山中の観察だけでははつきりしなかつた。流量の測定など観測して判定すると面白いのではなかろうか。それによつて氷河の後退や衰退の度合が大きく変わると思われる所以考慮しておく必要があらう。写真5はベースキャンプに入る手前の峠から見たアタ氷河の北流である。顯著な三つの氷河湖が存在している。氷河衰退の様子が解る写真だ。アタ氷河の北舌は後退するとともにその厚みが薄くなつてゐることも解る。

### 収縮する阿扎氷河(Ata Glacier)

おずは図3、以下の地図をじ覽いただきたい。阿扎氷河(Ata Glacier)が南東方向に流下し、途中で南北に分かれている様子と北支流の舌端に氷河湖が存在することが解る。カンリガルポ山群には棱線を跨いで二方向に流下する氷河が主稜線上に四箇所確認

の氷のマントを脱ぎ捨ててていよいに見える。私たちはこの北東稜が登攀可能かどうかという視点で詳しく観察を続けていたのが、残念ながら年々様相が変化し、それも危険度が増す方向に推移している。今後、氷壁のセラックスが剥げ落ち続けるとますます厳しい条件になるのではないかと思わせる。

一〇〇三年の若尼峰報告書によると連日降雪が記録されている。北緯一十九度ラインにある山群に全長三〇キロメートルの拉古(アグ)氷河や全長一十五キロメートルの阿扎(アタ)氷河が発達する訳だが納得のいく降雪量を記録している。既に述べたように一〇〇七年の偵察隊も降り続く雪に停滞を余儀なくされる日々が続いている。まだ積雪量は一〇〇三年と同様に多かった。

この地方の気候変動についての証言として、拉古(Ihagw)村の古老の話が参考になる。「昔は拉古氷河の谷は鬱蒼とした樹林に包まれ、氷河が村の近くまで押出していた。それが、今、谷は裸になり氷河がやせ細つて切れ切れになつて湖が出来た。」と言伝えられている。何年前のことかは定かではないが、最近の変化を考えるとこの地域の降水量の減少は明確ではなかろうか。

ちなみに氷河氷上の積雪は登山期間十月十八日～十一月十日の間にほとんど変化が見られず DPC(4440m)ド〇～十センチメートル 前進ベスキヤンパ (ABC、4680m)ド〇～百四十センチメートル C-1、(4890m)ド〇～十センチメートルであった。ABC の積雪が冬になると発生した雪が溜まるためだつた。C-1 の積雪がほとどなことは一度ないに南北と西から氷河が合流し、お鉢の底のような地形(Circ)で集熱されるためのようだ。実際、ABC より C-1 の方が暖かかった。登山ルートは C-1 から阿扎氷河の南支流のアイスフォールを登つて主稜線に出るのだが、氷河本流から支氷河の北斜面に入った途端に深い積雪となつた。C-2 (6680m)から C-3 (6910m)そして頂上への稜線は深いラッセルで苦労していざと思われる。阿扎氷河は標高四六〇〇メートル付近で氷河が

南北に分かれて流下し、南岳は深谷の標高一五〇〇メートル付近まで舌端を延ばしてゐるが、標高五〇〇〇メートル付近の風向きが西南西ないし南西の時は、南岳から吹き上げる湿った風が一度この氷河の分岐点あたりで雪を発生させ氷河上流と北岳方向に雪を降らせる。この局地的な現象により阿扎氷河の姉妹峰(KG-1、KG-2、KG-3)の大気が左右される。トポキャラクター(DPC)では毎日の積雪は多くて十センチメートル程度でしかも午後の暖かい日差しが融雪し氷の上を水が流れる状態であった。デポキャラント建設と第一アイスフォールのルート工作に取り掛かつた初期はこの天候のパターンを理解できずに慎重に行動したが慣れてみると午前中休養して午後に行動する」として連日行動が実施でき、高度順化を無理なくできつて荷揚げも順調に進んだ。

さて、一〇〇九年の天気はどうだったか。十月十八日、小雪のちりづく中でベースキャンプを設営、以降登山期間の前半は午前中雪、午後から晴と云うパターンが続いた。積雪は阿扎氷河の特異な地形の影響を受けていると思われる。阿扎氷河は標高四六〇〇メートル付近で氷河が

天気は後半になつてパターンが逆転し、午前中晴、午後からガスと小雪となり、風向きは西ないし西北西になつた。また、十一月に入ると気温も一気に下がり、主稜線の風も強くなりルオーネテラスの雪原をブリザードが吹きぬけるよつになつた。

二〇〇七年は十一月中旬にインド洋に大きなサイクロンが発生しこれがカンリガルポ山群方面に進んだ。東チベット全域に積雪をもたらして帰還の足を乱している。

以上の経験から実際に降雪量が減少傾向にあるのかどうかを判断することは出来ないが、カンリガルポ山群では年ごとに大きな変化があり、天候が登山隊の成否に大きな影響を与えることは間違ひなさそうだ。